



# 「サワガニ」



川ガニの代表と言えばサワガニかモクスカニの名前があがるが、一生を川で過ごすカニという意味ではサワガニこそ真の川ガニといえる。川の周囲にすむカニの仲間は数あれど、その多くは幼生期を海で過ごす「両側回遊」という生活史をもつものがほとんど。一生海を知らずに生きていくのはサワガニの仲間だけだ。夏の終わり頃になるとお腹に大きな卵や赤ちゃんガニを抱えたメス個体をよくみかける。他のカニと違いゾエアやメガロバという幼生期を卵の中で過ごし、卵から孵った時点ですでに親と同じ姿をしている。両側回遊型のカニが小さい卵をたくさん産んでわずかな生き残りにかけるのに対して、サワガニは大きな卵を少し生み更に孵った後もしばらくは母親のお腹で保護することで生き残りを多くするという少数精鋭の戦略というわけ。ところでサワガニの体色と言えばあなたはどんな色を思い浮かべるだろうか。



普通、北九州で見られるサワガニはこちらのタイプ。カラーでお見せできないのでわかりにくいですが、甲羅は黒褐色でハサミや脚が肌色をしたものがほとんどだ。



こちらは鹿児島県は大隅半島の…とある山の沢で見かけたもの。北九州産に比べるとかなり色が薄い。中には真っ青や真っ白なものまでいて色彩豊かなが地元ではそれが普通らしい。

もし北九州で大隅半島産のような色の淡いサワガニが見つければちょっとした話題になるくらいだが、大隅半島の方では逆に北九州で一般的な濃い色の方が珍しいという。

この色の違いは棲む場所の水質等にも関係があるらしい。正に「所変われば品変わる」を地で行くサワガニの地域色彩変異だ。サワガニはごくありふれた身近な生き物のひとつだが、体色だけで見ても実はとっても奥の深い生き物である。興味のある方は全国各地のサワガニを訪ね歩くのも面白いかもしれない。

## スタッフの飼育日誌

### “水槽の中にも春が来た!”

この原稿を執筆中だった3月10日、北九州地方では最高気温6度という真冬並みの寒波に包まれた一日でした。その数日前までは最高気温が15度もあっただけに、寒暖の差が身にしみ、気温の変化に身体を慣らすのが大変な一日でした。「三寒四温」という言葉に例えられるように、暖かい日と寒い日が交互に訪れながらじきに春らしくなっていく季節だから仕方ないのですが、さすがにこの温度差はこたえました。

さて季節は確実に春へと向かいつつあったそんなある日、館内の展示水槽の中に何とも意外な春の風物詩がこっそり顔を見せていました。それがこちら! (右上の写真)



そう「つくし」です。「どうせどっかの川の土手にでも生えていたのを、水槽の中とか嘘ついたヤラセ写真でしょう?」なんて声が聞こえて来そうですが、水環境館にヤラセという言葉はありません!

ニッポンバラタナゴやミナミメダカを展示している水槽は今では見かけることが少なくなった素掘りの水路をイメージしたレイアウトにしているのですが、当初ここに植物を植え込んだ土は通販で購入した「田んぼの土」でした。年中エアコンで室温管理している館内は室外とは対照的にほとんど寒暖の差がなく生き物たちにとっては季節感に乏しい環境なのですが、この土の中にスギナの胞子が紛れ込んでいたのでしょうか。わずかな温度変化が刺激となったのかこのタイミングで生えてきたようです。しかし

この水槽を作って今年で3年。これまでつくしが生えているのを私は見たことがありません。スギナ\*自体は毎年たくさん生えてくるので以前からも、もしかしらつくしが生えていたのに私が気付かなかっただけの事かもしれませんが…。

はたして来年の春にまたつくしが生えてくるのか?一年越しの小さな楽しみがまたひとつ増えました。みなさんも水環境館のレイアウト水槽でつくしを探して小さな春を見つけてみませんか?

(\*スギナの胞子茎がつくしと呼ばれています)



## 第40回 水環境館生き物講座

### 「北九州の干潟探検」を開催しました!

去る5月17日(日)久しぶりに生き物講座(実に8ヶ月ぶり)を開催しました。今回のテーマは北九州市の干潟の生き物を探しに行こう!ということで、北九州では知る人ぞ知る門司区のマル秘干潟スポットへと出掛けてきました。北九州市の豊かな自然を代表する干潟と言えば、小倉南区の曾根干潟があまりに有名です。しかし今回訪れたこの干潟は狭い場所ながらも曾根干潟に決して引けを取らない豊かな干潟環境が残された北九州のホットスポットと言っても過言ではありません。当日は大潮だったため現地では潮干狩りを楽しむ多くの方達のそばで野鳥や塩生植物、干潟の底生生物などの観察を行いました。小倉の中心地から車でほんの30分ほどの場所に貴重な種類を含むたくさんの生き物たちと出会える干潟があることに、参加者の方からは驚きの声が上がっていました。

狭い場所ながらも多様な生き物たちが暮らせる、様々な環境が残されているこの「奇跡の干潟」が北九州の自然遺産、文化遺産としてこれからも在りつづけることを願ってやみません。